

## 事業報告書（令和元年度）

事業名 大人の社会参画の機会を拡げ、子どもの「思い出格差」を解決するプロジェクト  
団体名 特定非営利活動法人チャリティーサンタ 担当者名 河津 泉  
※活動の様子がわかる写真（データもお願いします）と説明を必ず添付してください。

### 1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

#### ◆活動内容＜全体＞

気軽に参加できる社会貢献活動として、『サンタクロースのチャリティー訪問活動』を実施し、地域での当事者意識を持ったボランティア育成を促していくとともに、地域の「社会課題への発見（子どもの貧困等）」に繋げる活動を行った。

チャリティーボランティアに参加した寄付者・ボランティアの働きにより、経済的な理由で「思い出不足」の子どもたちがサンタクロースと会える、という特別な経験を提供することで、自分を応援されていること、誰かに見てもらっていることを実感でき、子どもの自己肯定感を育む機会につなげる他、家庭へ「社会的なつながり」を届けることを行った。

また、この事業を一過性のものにならないため、当活動を社会参画の入り口とし、参加したボランティアが社会に関わりやすい仕組みをつくるものとして実施した。

本番実施日時：2019年12月21日(土)、12月24日(火)

※12月21日は主に真備の被災家庭を中心に訪問

サンタクロース訪問世帯：91家庭（内、困窮世帯58家庭）

ボランティア参加者：86名

困窮世帯へのサンタクロースからの手紙送付（+絵本）：291家庭

※困窮世帯(被災家庭も含む)のサンタクロースとの思い出を希望する家庭は349件あったが、ボランティアの数に限りがあったため、訪問は58家庭となった。訪問を希望する家庭を対象に抽選を行い、外れた家庭に関しては「サンタからのお手紙」と「絵本のプレゼント」が届くように手配した。

#### ◆ボランティア研修会

研修会を通じて、チャリティー金の使用先としての社会課題の認知をしてもらうとともに、ボランティア活動の事前練習会を行った。

・対象：ボランティア参加86名（参加必須）

＜いずれかに参加（内容は同じ）＞

10月26日(土) 13:00～16:30 エルヴェ・スペース

11月9日(土) 13:30～17:00 Branch岡山北長瀬内ハッシュタグシェアスペース

11月16日(土) 13:00～16:30 キューティパイ倶楽部

11月24日(日) 13:00～16:30 岡山県ボランティア・NPO活動支援センター：ゆうあいセンター

12月1日(土) 13:30～17:00 Branch岡山北長瀬内ハッシュタグシェアスペース

12月7日(土) 13:30～17:00 Branch岡山北長瀬内ハッシュタグシェアスペース

12月15日(日) 13:00～16:30 岡山県ボランティア・NPO活動支援センター：ゆうあいセンター

※ 上記以外にも合わない人は個別研修を実施

#### ◆困窮世帯へのプレゼント選書会

困窮家庭に対して、団体側でプレゼントを準備した。今年は岡山市を通じての広報効果が大きく、訪問が叶わない家庭に関しても、対象家庭に対しては「サンタクロースからの手紙」と「絵本のプレゼント」が届くようにした。

ノートルダム清心女子大学では児童学科の「絵本に関する授業」を中心に家庭の様子を確認しながら学生たちと選書活動を行った。

2019年12月12日(木)・13日(金) ノートルダム清心女子大学

参加学生：約100名

2019年12月14日(土) エルヴェ・スペース

ボランティア参加：10名 ※一般ボランティアと実施

その他企画運営に関するミーティングや、準備などの集まりを開催。  
イベントの開催などを通じて、広報活動も行った。

## 2. ESDの視点を取り入れたところ、ESDの視点で見直したところ

●困窮家庭の子どもたちへのプレゼント選択を大学と一緒に  
授業の一環として、大学で選書会を実施し、学生たちの学びと社会参加を組み合わせる  
形で行った。

通常授業の前段階として子どもの貧困についてや家庭の状況を伝えることで、  
また「児童文化論」という子どもと絵本についてなどを取り上げた授業を

●企業連携などを通じて、様々な人が寄付に参加できるように。またその啓発。  
ブックサンタという「本屋さんでできる絵本の寄付の仕組み」を「丸善シンフォニー  
店」で展開。メディアにも取り上げていただき、多くの方が絵本の寄付に参加をしてく  
ることができた。

●かつての「届けられる側の参加」やそのためのアクション  
子どもたちに対しての声かけを行った。2009年にプレゼントを届けた子どもが高校生  
となり、ボランティアとして参加してくれた。  
また次世代の子どもたちが地域を支える側になれるように、家庭への声かけや情報提供  
などを行った。

## 3. 取組の成果(参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など)

●家庭の変化や反応  
困窮世帯の応募動機として、「生活の苦勞」、「子どもにたくさん我慢をさせてい  
る」、「せめてクリスマスだけでも楽しく過ごしたい」という声が多くあがってい  
た。子どもへ我慢させているという気持ちは親の罪悪感、しんどさにつながっている  
様子が伺えた。

訪問後には「特別な思い出となった」ということはもちろん「自分にとっても良い  
思い出になった」という声が届いた。

また、通常申し込みの家庭(チャリティーをいただく訪問)からは「今度は自分も支  
える側にまわりたい」といった「支援者」としての意識が強まる声があがっていた。こ  
ちらに関しては「サービスを受ける側」が「サービスの提供側」になるという、体験による実  
感と学びに繋がっている。

家庭から寄せられたエピソードを別紙で共有する。

(事後アンケート(エピソード)別紙参照)

- ・普段はなかなか持つことができない特別な思い出に(シングル家庭)
- ・難病の困難のなかでも、前向きな気持ちに。(難病を抱える家庭)
- ・家庭の「社会参加する側になりたい」意欲の向上(通常申込家庭)

●ボランティア参加者の変化や反応  
絵本の選書会では、家庭の個人情報とは抜いた形で、困窮世帯の「応募動機」や「子ども  
の様子(年齢や性別)」を元に学生が子どもたちに絵本を選ぶ形で行った。

「このような家庭があるのだと知った」

「自分が普段学んでいることでも関わられて嬉しかった」

という声が届き、大学の授業内の学びから自分たちが住む地域の子どもたちが抱える課題に紐付ける動線をつくることができた。

また当日のボランティア参加者からは  
「子どもと親御さんの素敵な日に立ち会えたことが本当に嬉しかったし、子どもの嬉しそうな顔を見てとても感動しました。」  
「プレゼントを届けに行ったのに 訪問した家庭の子どもから そしてその保護者から素晴らしい心をいただいた」  
といった「してあげた」ではなく「自分も」ボランティア活動や社会に関わる楽しさや社会の担い手としての自覚などが芽生えた様子も伺えた。

#### 4. 今後の課題と展望

今回、困窮家庭への声かけを岡山市こども福祉課を通じて行ったこともあり、応募が多数あった。しかしながら、ボランティアに限りがあるために代替案を提供する家庭も多くなった。

サンタとの思い出を求める声を確認すると「クリスマスぐらいは（普段からも体験が足りていない）」という状況が見え隠れしており、体験の格差を埋める必要がある。そのためにも心に残る思い出の必要性を伝えるとともに、ボランティアの募集などに務める必要がある。

(様式第8号)

(当日の様子)



集合写真



はじめてサンタさんがきたのは小学校1年生。今年は届ける側として参加。

(様式第8号)



(様式第8号)

2019年12月

(練習会の様子)

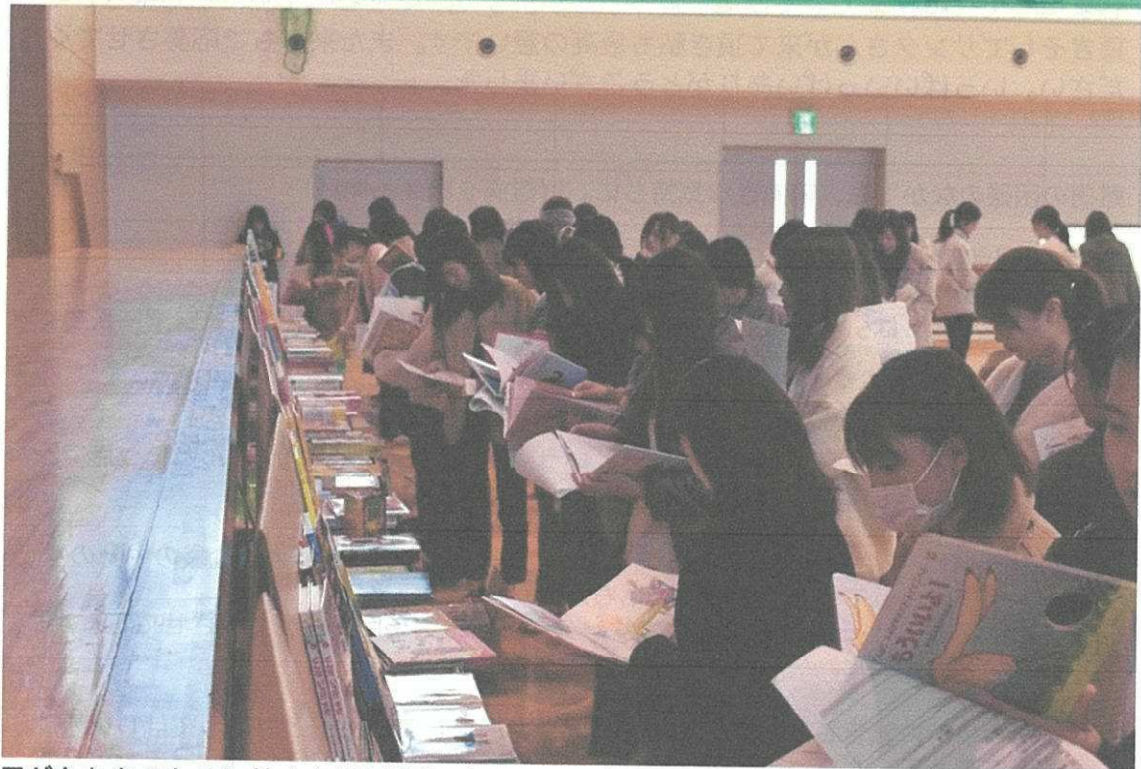


(選書会)



寄付者のみなさまのおかげで、たくさんの絵本が集まりました！

(様式第8号)



子どもたちのために絵本を選ぶ学生（ノートルダム清心女子大学）

(様式第8号)

<別紙家庭からのエピソード>

団体の狙いとしていた成果部分については背景を黄色に抽出。

普段はなかなか持つことができない特別な思い出に (シングル家庭)

「サンタさんが来た時にもびっくりしてましたが、照れながらも嬉しそうに頷いてしっかりプレゼントも貰って、絵本だけかと思っていたらお菓子まで！  
きっと素敵な思い出になったと思うし私自身もこんな経験ができてうっとしました。帰られたあとも嬉しそうにずっと話していて素敵なクリスマスをありがとうございました。

サンタさんが来てくれるなんてそうそうない出来事ですしこんな企画があったことも初めて知りましたが、父親が居らず特別なことが出来ない分、本当に有難かったです。また機会があったら是非お願いしたいです。」

「今日は本当にありがとうございました。感謝の言葉しか見当たりません。おばあちゃんと息子にサンタさんと初めて出会えた娘の様子をいっぱい聞きました。最初は固まってたみたいで、娘からも直接話を聞いても嬉しかったみたいであんなに笑って話す娘は今年初めてでした。母親がいない分私が常日頃から淋しい想いをさせまいと色々頑張ってきましたが限界がありまして...でもこの企画にご応募させて頂きそしてサンタさんが来て頂き私も最高の想いです。また来年もご応募させてください。いっぱいいっぱいありがとうございました。」

難病の困難のなかでも、前向きな気持ちに。(難病を抱える家庭)

今年で3回目の利用です。

来てくれたサンタさんは今年も同じサンタさん。

例年と違ったことは引っ越しをした事と、サンタさんと一緒に妖精さんもお家に来てくれた事。

昨年とは環境も色々変わり、この一年たくさん頑張ってきた子どもたち。

引っ越しをしても会いに来てくれたんだ...という点と今年も同じサンタさんという点で安堵感も見られたように思います。

5歳の息子はサンタさんのお話を聞いてはいるのですが、白い大きな袋の中身のプレゼントが気になって仕方がないので落ち着きがなくソワソワ。

13歳の娘は冷静ながらも、心踊らせてサンタさんのお話を目をキラキラさせてしっかり聞いてくれていました。

わたしから事前に報告しておいたエピソードもお願いしていた子どもにしてほしい事も、完璧に覚えてくださっていて、サンタさんと子どもたちで前年から今日までの日常での出来事を自然と会話してくれていました。

中でも娘に最後に教えてくれた魔法。

『ありがとうの魔法』はこの一年の我が家のキーワードになりそうです。

最近、年頃になってきた娘。思春期に入る年齢ではありながら病気の事を受け入れられているわけではないことで、病気である自分は何も出来ないと言い訳に使う事が増えてきていました。

同時に同年代の子との交流で困難を感じたり、傷つかないように守ったりの折り合いを



(様式第8号)

付けるためにも彼女自身必死なのだとは思いますが、学校でも家でも病院でも不真面目な態度が目立ち様々な問題が起こり、その度にみんなで相談して向き合って話をするのですが、なかなか伝わらず、わたし自身「当たり前の子供を子どもに教える」ということに困難を感じ、苛立ちを感じてしまうことも増えていました。

その中のサンタさんの訪問。サンタさんからの『ありがとうの魔法』のアドバイスはわたしも元気になれそうで、感謝しております。

サンタさんが帰ってから、子どもたちと一緒にサンタさんのお約束を思い出しながら文字で残して、目のつきやすいところに貼らせていただきました(\*^^\*)

年々成長していく子どもたち。

環境が変わるなかで懸命に成長している子どもたち。

そんな子どもたちと一緒に見守ってくださるサンタさんが居てくれることは我が家にとって最高のプレゼントです(\*^^\*)

家庭の「社会参加する側になりたい」意欲の向上（通常申込家庭）

最後のチャリティーサンタさんでした。涙、涙の最終回でした。息子が泣くなんて…転んでも、まったく泣かない子どもだったのに。

今年のクリスマス前「サンタさんに何もらうの？」と聞いたら「サンタさんがぼくを子どもだと思って、何かくれるならそれはうれしいけど、もう大きくなったから、何も望むものはないな。もっと他の子どものところへ行っただ方がいいように思うんだよね」と…。なので、最後のチャリティーサンタさんにすることにしました。もうおもちゃで遊ばなくなってきたことも、最後にするきっかけの一つでした。「これが最後の訪問になると思う」という話があったとき、息子涙が何度もこぼれ出るくらいに泣いていました。

次はサンタさんの裏方を経験してみるのもいいかも…と思い、私が事前にスカウトをお願いしていました。

「サンタさんにはクリスマス以外でもいつでもなれるぞ。それは誰かを思いやる優しい気持ちを分けてあげることじゃ」と、人間として超大切なアドリブを織り混ぜてくれるサンタさん。

そして、「サンタさんの手伝いをしたいと願ってくれたら、手紙を出すから、手伝いに来てくれ。また会えるのを楽しみにしているよ」とのお話もありました。チャリティーサンタさんのおかげで、ちょっと変わったサンタさんとのつながりを持った息子。

サンタさんの存在を疑っていないのに、自分から卒業していきました。すごくきれいな終わり方。親からしたらあっという間。

いつか、息子と私もサンタさんに加われたらいいなと思います。きっと、子ども自身が、自分を支え、励まし、共に喜んでくれる大人が地域にたくさんいることを知ることができると思います。そして、それを今度は地域に返していくことを考えられるきっかけを与えてくれます。